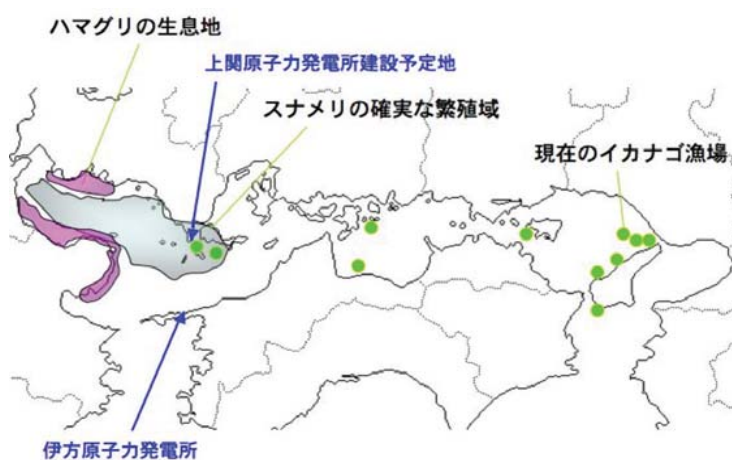


上関原子力発電所計画と日本生態学会の取組（年表）

- 1982年10月：中国電力が「上関町が原発建設の有力地」と発表
- 1999年4月：「上関原子力発電所（1,2号機）環境影響調査書」提出
- 1999年6月：環境影響評価法施行
- 2000年3月：上関原子力発電所建設予定地の自然の保全に関する要望書
- 2001年3月：上関原子力発電所に係る環境影響評価についての要望書
- 2001年6月：「上関原子力発電所（1,2号機）に係る環境影響評価」提出
- 2003年5月：上関原子力発電所（1,2号機）の詳細調査に着手しないことを求める決議（日本生態学会中国四国地区会）
- 2005年4月：中国電力が原子炉設置許可申請のための詳細調査開始（2009年まで）
- 2008年6月：上関原子力発電所建設計画に係る希少鳥類への影響評価に関する要望書（日本生態学会自然保護専門委員会）
- 2008年10月：山口県知事が中国電力に公有水面埋立許可書を交付
- 2009年12月：中国電力が「原子炉設置許可申請」を経済産業省に提出
- 2010年3月：上関原子力発電所建設工事の中断と生物多様性保全のための新たな調査と対策を求める要望書



瀬戸内海西部・周防灘の生物多様性と迫り来る危機（加藤 2010）



祝島の神舞（↑） 詳細地図（↑） 田ノ浦から望む祝島（↓）



瀬戸内海の原因風景と生物多様性が残る海

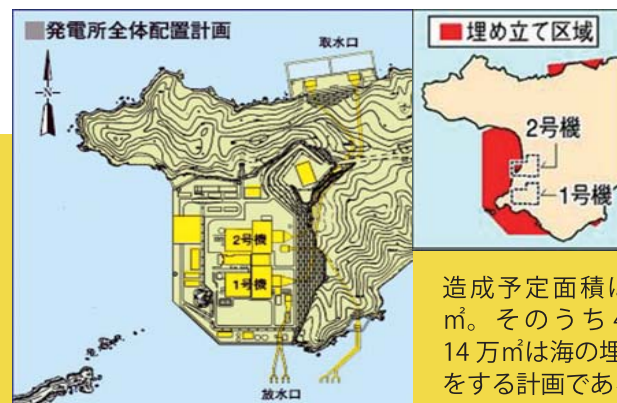
白砂青松の瀬戸内海が開発によって失われて何十年もの年月が流れた。ところが、瀬戸内海の西の端の周防灘の上関には失われたはずの生き物たちが生きのびている奇跡の海が今もある。ここに原子力発電所の計画が浮上してやがて30年の歳月がたとうとしている。

1999年6月の環境影響評価法の施行の直前に中国電力（株）が駆け込みで提出した環境影響評価書の内容は、旧態依然たるものであった。日本生態学会では自然保護専門委員会内の上関要望書アフターケア委員会が現地の自然保護団体「長島の自然を守る会」と協力しあって現地調査に取り組んできた。生態学会の延べ8回におよぶ要望書は、この奇跡の海が失われれば、瀬戸内海の生物多様性の復活は望めないという強い危機感に基づいている。

陸地に抱かれるように、静かな水をたたえる瀬戸内海は、木々の緑を水面に映す、波おだやかにして潮通しのよい海である。内海の湾奥には干潟が、潮流の早い浅瀬には砂堆が形成されやすい。瀬戸内海は、シマヘナタリなどを産する多様な干潟環境と、イカナゴが湧く砂堆に恵まれ、イカナゴやスナメリ、シロエリオオハムなどのアジ類が織りなす特色ある食物連鎖と、その食物連鎖に介在した共生的な伝統的漁法によって特徴づけられていた。周防灘には瀬戸内海の他の水域ではほぼ絶滅してしまったハマグリやアオギスの生息する干潟や、イカナゴやスナメリ、カサヤマシセンなどの生息する海域が残っており、あらたにカンムリウミスズメなどの海鳥が見つかるなど、その自然の価値はきわめて高い。

瀬戸内海の生物多様性のホットスポットである周防灘のまさに心臓部に原子力発電所を建設すれば、海水温の上昇や海水の放射能汚染だけでなく、毎秒190トンにおよぶ温排水中多量に投入される殺生物剤によるプランクトンの大量死滅をもたらす、周防灘の生物多様性に不可逆的な悪影響を与えるに違いない。

中国電力は原子力発電所予定地である田ノ浦を埋め立てようと何度も試みた。しかし、埋め立てをさせまいとする対岸の祝島の島民たちやシーカヤックの若者たちが、丸腰で、風とうたれ、波にうたれながら、実力で工事を阻止し続けている。瀬戸内海の自然を再生する道が残されているとしたら、瀬戸内海の伝統的ななりわいを続けてきた祝島の島民たちとともに、長島周辺の奇跡の海をこのままの形で未来に残すしかないであろう（日本生態学会上関要望書アフターケア委員会編、2010『奇跡の海』南方新社、主として加藤真氏の巻頭論文からの引用）。



造成予定面積は33万㎡。そのうち40%の14万㎡は海の埋め立てをする計画である。

2010年10月、編集・日本生態学会上関要望書アフターケア委員会
発行・日本生態学会自然保護専門委員会
協力・長島の自然を守る会 協賛・LUSHチャリティバンク

"奇跡の海"に原発!?
上関・瀬戸内海の生物多様性ホットスポット



中国電力（株）は瀬戸内海に面した山口県上関町に2基の原発（1基137.3万キロワットの改良沸騰水型原子炉）を建設しようとしている。予定地が瀬戸内海最重要の生物多様性ホットスポットであることから、日本生態学会では2000年以来この計画に強く異議申し立てをしている。危機に瀕する海の現状を知ろう。